【研究論文】

トランスジェンダー当事者における性別違和への気づきからカミングアウトを行うプロセスの検討

――複線径路・等至性モデルによる FtM を自認する当事者の語りの分析――

宇田　乃絵[1)]・五位塚和也[2)]

キーワード：トランスジェンダー　性別違和　カミングアウト　複線径路・等至性モデル

要約：本研究では，トランスジェンダー当事者における性別違和への気づきからカミングアウトを行うプロセスを明らかにし，当事者が抱える葛藤に対する有効な教育的支援について検討することを目的として，3 名の FtM 当事者に対して面接調査を行った。複線径路・等至性モデルによる分析の結果，(1) 性別違和に気づいた児童生徒は，学校生活に含まれる様々な制度や慣習の中でジェンダーに関する葛藤を繰り返し経験していること，(2)「トランスジェンダー」という概念を知ることで違和感の正体がわかって安堵する者もいるが，ネガティブな情報に触れることで人知れず葛藤を強める者もいること，(3) 最初のカミングアウトは同年代の仲間関係の中で行われることが多く，そこでの被受容体験が次のカミングアウトを促進することが示された。また，これらのプロセスを踏まえ，学校教育の課題と有効な教育的支援を可能にする環境について考察した。

1　問題

LGBT とは，Lesbian（レズビアン，女性同性愛者），Gay（ゲイ，男性同性愛者），Bisexual（バイセクシュアル，同性愛者），Transgender（トランスジェンダー）の頭文字から造られた単語で，セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称の一つである。中でも，本研究で対象としている，トランスジェンダーとは，自らがある性別に属しているという自己イメージを意味するジェンダー・アイデンティティ（性自認）が，出生時の性別（身体的性）に一致しない状態を指す（American Psychiatric Association, 2015）。現在，これらのセクシュアル・マイノリティに関する講演会が各地で開かれるようになるなど，社会的関心が急速に高まりを見せている。しかしながら，わが国においては，教育や医療，労働，公的サービスなどの様々な領域

１）大阪府立光陽支援学校
２）大阪大谷大学

において，セクシュアル・マイノリティの人々への配慮が十分に行われているとは言えない現状がある。

2010 年 4 月，文部科学省は「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について（通知）」を各都道府県教育委員会へ通知した（文部科学省，2010）。その中で，児童生徒が抱える問題は多様化し，ますます複雑になっている現状が指摘され，「性同一性障害のある児童生徒は，〈中略〉学校での活動を含め日常の活動に悩みを抱え，心身への負担が過大なものとなることが懸念されます。こうした問題に関しては，個別の事案に応じたきめ細やかな対応が必要であり，学校関係者においては，児童生徒の不安や悩みをしっかり受け止め，児童生徒の立場から教育相談を行うことが求められております」と述べられた。この通知は，文部科学省がセクシュアル・マイノリティに悩む児童生徒の存在を公式に認め，学校現場の教職員に対して児童生徒の相談に応じることや関係機関との連携をはじめとして，児童生徒の心情に配慮した対応を求めたことを示すものとして社会的に注目を集めた。その後，文部科学省は 2013 年に「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を実施し，2014 年にその結果を発表した（文部科学省，2014）。その調査結果から，不登校状態や保健室登校の状態に陥っているケースや家庭の理解が得られないケース，自身の身体的な性と自認している性の不一致に悩んでいるケースが少なからず存在し，性別違和のある児童生徒が在籍する学校の 4 割が「特別な配慮をしていない」と回答している現状があることが示された。このように，トランスジェンダー当事者が周囲の理解を得られず，孤立し，自らの性に関する悩みを独りで抱え込んでしまうことにより，当事者のメンタルヘルスが著しく損なわれることが考えられる。したがって，学校などの場においてトランスジェンダーに対する適切な対応について検討することは，多様な背景をもつ児童生徒の個々のニーズに応じたきめ細やかな指導・支援を行う体制を考えることにつながると言えよう。

セクシュアル・マイノリティの人のメンタルヘルスに関連する要因の一つとして，カミングアウトが挙げられる。カミングアウトとは coming out of closet（クローゼットから出る）という語源があり，一般的に，自分以外の他者に自らのセクシュアリティを明確な形で宣言することはカミングアウト，周囲からの圧力によって自らのセクシュアリティを表明することができない状態はクローゼットとされる（金田，2003）。トランスジェンダー当事者においても，自らのセクシュアリティを明らかにすることは社会的に不利益を被る可能性があるため，シスジェンダー（身体的性と性自認が一致している状態）を演じる者も少なからずおり，それによる様々な葛藤や悩みを抱えることもあると考えられる。石丸（2005）は質問紙実験を行い，セクシュアル・マイノリティの人にとって，受容される体験によって自尊心が上昇するものの，それに対してカミングアウトの有無は影響せず，カミングアウトをせずとも十分に適応的に過ごせることを述べており，カミングアウトが必ずしも有益ではないことを示唆している。しか

し，石丸（2005）は，質問紙実験であったことの限界や，初対面を想定していたことなどから，その結果を一般化できない可能性があり，身近な他者や重要な他者に対するカミングアウトについて検討すべきであることを指摘している。また，三宮（2014）では，女性同性愛者（両性愛者）を対象として質問紙および面接調査を行い，カミングアウトすることに対する肯定的な反応が 2 回目以降のカミングアウト，メンタルヘルスの増進，自尊心の維持に影響を与えていると推察される語りが示された。高藤・岡本（2017）は，男性同性愛者（両性愛者）を対象として面接調査から，カミングアウトがカタルシスや関係を円滑にする手段になっていることを示唆した。

トランスジェンダーのカミングアウトについての研究は少ないものの，家族へのカミングアウトと学校へのカミングアウトについて検討されている。荘島（2010）は，トランスジェンダーの娘からカミングアウトを受けた母親による語り直しの分析を通して，カミングアウトは性的少数者にとって自己を認める最終課題であるだけでなく，カミングアウトを受ける親の側にとっても自己の再編が求められる課題であり，親子関係の再編作業の契機となることを指摘した。また，土肥（2015）は，トランスジェンダーの人の学校経験に関するインタビューから，ジェンダー葛藤の解決の手段として学校へのカミングアウトという方法を見出すものの，カミングアウトを受け止める他者のあり方によっては葛藤の軽減とならないことを指摘した。このように，トランスジェンダーのカミングアウトをめぐるプロセスを検討する上では，カミングアウトに対する相手の反応やその後の関わりに焦点を当てる必要がある。また，いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン（2014）の LGBT の学校生活に関する実態調査によると，性別違和を有する人は，カミングアウトの対象として，家族や学校の教員よりも同年代の友人を選択していることが指摘されている。したがって，トランスジェンダー当事者のカミングアウトについて検討する際には，誰に対してどのような心情でカミングアウトを行ったのかを検討する必要があると考えられる。

以上より，本研究では，トランスジェンダー当事者への面接調査を通して，性別違和への気づきから，家族や友人，教員などの周囲の身近な人物へのカミングアウトを行うプロセスについて，トランスジェンダー当事者の心情の変容に焦点を当てて明らかにすることを第一の目的とする。また，そのプロセスの中で，トランスジェンダー当事者のジェンダーに関する葛藤やカミングアウトをめぐる葛藤に対する有効な教育的支援について検討することを第二の目的とする。

2　方法

(1) 研究協力者

本研究ではトランスジェンダー当事者（平均年齢 22.33 歳；標準偏差 3.05 歳）にインタビューを実施した。研究協力者のプロフィールは Table 1 に示した。本研究では，研究目的に沿って，出生時の身体的性と性自認が異なり，家族や友人などの周囲の人へのカミングアウトを既に行ったことのある者を調査対象とした。まず，第一筆者の知人であった A 氏に調査依頼を行い，A 氏から B 氏と C 氏を紹介してもらい，研究協力の依頼を行った。なお，本研究の研究協力者は 3 名全員が，トランスジェンダーの中でも出生時の性別は女性でありながらも，性自認は男性である，Female to Male（FtM）であった。

(2) 手続き

2020 年 12 月に，約 60 分から 90 分の半構造化面接を行った。面接は A 氏および C 氏は遠方に在住していたため，テレビ会議システムを使用した遠隔での調査を行った。B 氏に対しては静かで落ち着いて話すことのできるプライバシーの守られた場所で調査を行った。

(3) 面接内容

面接調査では，まず，フェイス項目（セクシュアリティ，年齢，職業，家族構成）について質問した。次に，共通する項目として，「自分の性に対して違和感を覚えたのはいつですか？その時から，周りの人へカミングアウトをするまでの経験をお聴かせください」と質問した。その後は，研究協力者の回答に応じて対話をしながら，「カミングアウトをした際の，相手の反応はどのようなものでしたか」，「カミングアウトをした後に，どのような関係の変化がありましたか」という質問を加えた。

Table 1　研究協力者のプロフィール

研究協力者	年齢	概要
A 氏	22 歳	第一著者の知人であり，調査当時は福祉施設職員として勤務していた。家族構成は父親，母親，兄がいた。高校 3 年生の頃にジェンダークリニックを受診し，半年間通院後に「性同一性障害（性別違和）」と診断された。
B 氏	19 歳	調査当時は土木作業員として勤務していた。家族構成は父親，母親，兄がいた。中学 3 年生の頃にジェンダークリニックを受診し，約半年間通院後に「性同一性障害（性別違和）」と診断された。
C 氏	25 歳	調査当時は販売員として勤務していた。家族構成は父親（C 氏が 21 歳のときに母親が再婚した），母親，妹がいた。20 歳の頃にジェンダークリニックを受診し，約 9 ヶ月間通院後に「性同一性障害（性別違和）」と診断された。

(4) 分析

分析方法には複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model；以下，TEM）を採用した。TEM とは個人の経験の多様性を描くために，時間を捨象せず人間の多様性や複雑性を扱うための方法論である（安田・サトウ，2012）。トランスジェンダー当事者が性別違和に気づき，カミングアウトに至るプロセスに関連する要因は非常に多様である。そのため，時間経過における個々人の経験の変化の過程を平均像にまとめてしまうのではなく，選択や行為，気持ちや認識の共通性と多様性を見出し，それぞれの連なりによって構成される固有の径路として捉え，個人的・文化的制約の中での変化の等至性を重視する点に TEM の特徴がある。

TEM を用いて分析を行うにあたって，本研究において用いた TEM の主要概念について説明する。「等至点」とは，多様な径路がいったん収束する点を示し，研究上焦点化される点である。径路を描いていく上で，個人の選択に影響を及ぼした社会的要因は「社会的ガイド：SG」と「社会的方向付け：SD」として表わされる。社会的ガイドとは個人が望む方向へ支援する力の総称であり，本研究ではジェンダー葛藤を軽減する要因やカミングアウトを促進する要因を社会的ガイドとした。これに対して，社会的方向付けとは個人が望んでいない方向へと向ける環境要因や文化的な力の総称であり，本研究ではジェンダー葛藤を強める要因やカミングアウトを阻害する要因を社会的方向付けとした。

本研究においては，3 名の研究協力者から得られたデータをもとに，以下のプロセスで分析を行った。まず，各事例の逐語録を繰り返し精読し，語られた内容をエピソードごとに切片化し，分析における最小単位とした。そして，その内容を端的に表す見出しを付けた。次に，性別違和を感じ始めてから，カミングアウトを行い，カミングアウトをした相手とのその後の関わりについての経験を時間経過に沿って並べた。特に，本研究では〈性別違和を感じる〉という経験と〈カミングアウトを行う〉という経験を等至点とし，3 名の研究協力者に共通する経験を必須通過点として TEM 図に示した。TEM 図への示し方として，切片化した各経験を実線で囲み，等至点は二重線で囲み，必須通過点を太線で囲み，両極化した等至点を点線で囲んで示した。また，各経験をつなぐ矢印は，実際に研究協力者から語られた径路を実線で，実際のデータにはよらないものの社会通念上，理論的に存在すると考えられた径路を点線で示した。さらに，社会的ガイドを上向き矢印付きの囲み，社会的方向付けを下向き矢印付きの囲みで示した。最後に，「非可逆的時間」という時間の非可逆性を示す概念を TEM 図に示した。

(5) 倫理的配慮

調査対象者に研究協力の依頼をする際に，本研究の目的，録音によるインタビュー内容の記録，録音した音声データ等は筆者が厳重に保管をすること，研究目的以外に音声データ等の記録を使用しないこと，プライバシーの保護や守秘義務に最大限の配慮をすること，回答は自由

意志であり中断が可能であること，回答拒否における不利益はないことを説明し，研究に対する同意を求めた。調査対象者から同意を得たうえで面接調査を実施した。

3　結果

トランスジェンダー当事者の性別違和への気づきから周囲の人々へのカミングアウトを行うプロセスについて，個人の生活史に特有の文脈と時系列に沿った経験の分析を行い，その経路を示した TEM 図を作成した（Figure 1）。そこで，まずトランスジェンダー当事者の性別違和への気づきから周囲の人々へのカミングアウトを行うプロセスについて示した Figure 1 の TEM 図に関する説明を行う。その上で，トランスジェンダー当事者の性別違和への気づきから周囲の人々へのカミングアウトを行うプロセスにおいて重要な分岐点となった経験について述べる。その際，等至点や必須通過点，その他の分岐点を〈　〉，社会的ガイドや社会的方向付けを《　》で記述することとした。

（1）TEM 図の作成

トランスジェンダー当事者の経験の中で，自らの身体的性と性自認の不一致を感じる経験が全ての研究協力者から語られたため，〈性別違和への気づき〉の経験を初めの等至点とした。この等至点を起点として，カミングアウトをめぐるプロセスを時間の流れに沿って示した。

カミングアウトをめぐるプロセスにおいて，研究協力者全員が辿った径路を必須通過点として示した。まず，性的違和への気づきから，学校生活等でジェンダーに関する葛藤が続く経験があり，〈生活の中でジェンダーに関する葛藤を抱く〉とした。次に，自身の性別違和の経験を説明するものとして「トランスジェンダー」という概念を見出す経験があり，これを〈「トランスジェンダー」概念の発見〉とした。続いて，親しい友人や恋愛対象の相手など，仲間関係の中で自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトする経験があり，これを〈仲間関係でのカミングアウト〉とした。その後，親に対して自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトする経験があり，これを〈親へのカミングアウト〉とした。そして，もう一方の親や祖父母などの親族，学校の教師など，カミングアウトの対象が広がる経験があり，これを〈カミングアウトの対象の広がり〉とした。

最後に，自認する性別への身体的治療を開始したり，周囲に自認する性を公にして生活したりするようになる経験が全ての研究協力者から語られたため，〈トランスジェンダーとしてありのままの自分の生き方を選択する〉という経験を等至点とした。

以上のように，トランスジェンダー当事者のカミングアウトをめぐるプロセスを示した TEM 図は，トランスジェンダー当事者が辿ってきた径路を左から右へ水平方向に流れる時間

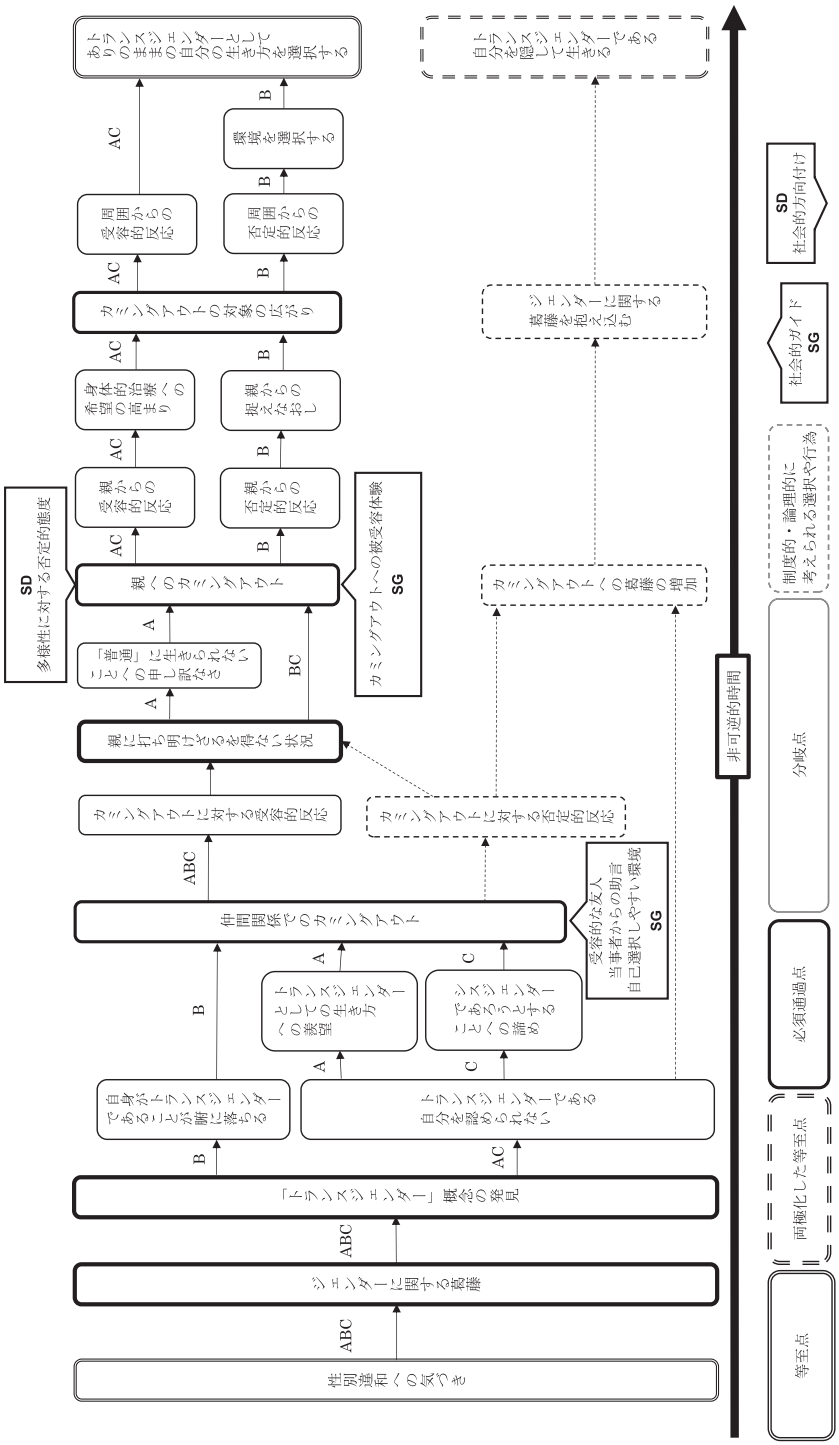

Figure 1　トランスジェンダー当事者の性別違和への気づきからカミングアウトを行うプロセス

軸に視覚化して表し，そこから読み取れるトランスジェンダー当事者における重要な転換期となった体験を以下に示した。なお，等至点および必須通過点となった各研究協力者の経験に対する見出しと語りの例について，Table 2 に示した。

Table 2　等至点および必須通過点に関する見出し例と発言例

等至点／必須通通過点	見出し例	語りの例
性別違和への気づき	制服への拒否感	僕が通っていた幼稚園は制服があったんですよ。それで女の子はスカートを履きなさいって必然的になるじゃないですか。それでも僕は断固として履かなかったですね。履きたくなかったので。親に「嫌」と言いまくって何とか逃れました。（C 氏）
	自分の性的指向への気づき	中 2 のときに女の子を好きになって，自分も「女として扱われておかしいな」ってなった。（B 氏）
	自認する性（男性）を指摘されることへの不安	高校の入学説明会のときに，制服の選択肢にズボンがあったんよ。「スカートかズボン，どっちでも良いですよ」みたいな。そのときに，おかんに「ズボン履いて行けるならズボン履きたいな」ってぽろっと言ったんよ。そしたら，「良いけど，周りの子の様子見てからにした方が良いんじゃない？」って言われて，「まあ，確かに」って思って，だから入学式はスカートで行った。案の定，ズボン履いている女子は 1 人もおらんやんか。そこで，新しい環境で自分だけ浮くのも嫌やし。で，何か気づき始めたんよ。「ズボン履くことで，自分が男ってバレるのが嫌」って思って。そんな恐れがあって。（A 氏）
ジェンダーに関する葛藤	授業における葛藤	体育の更衣も嫌でしたし，水泳の授業は一番苦痛だった思い出があります。（C 氏）
	制服登校に対する葛藤	中学校では一応女子なので，強制でスカートを履いて女の子で過ごす努力をして，高校でも強制でスカートを履きましたね。（C 氏）
	学校行事への葛藤	修学旅行は 1 ヶ月前から「行かない」って言い切っていた。ていうのも，お風呂とか中学のときより違和感が強くなってしまっていたから。また温泉とかになったら耐えられへんし，着替えとかもどうしようって思っていて。「そんなこと考えるのも面倒くさいな」ってなって行かないって決めた。修学旅行で同じ班の女の子にも「自分，行かへんから」って言っていた。でも，やっぱり「何で？」ってなるし，先生も友達も理由を聞いてくるけど，「いや，何か行きたくないから」としか言えなくて。（A 氏）
	友人との関心が合わない	高 1 って，急に化粧の話とか，まつエクがどうとか，そういう話をしだすわけ。で，そういう話に自分は興味がないから。好きなタイプとか，恋バナとか，自分が女子の中に交じって話していることがもう何か違和感でしかなくなってきて。（A 氏）
「トランスジェンダー」概念の発見	当事者の体験を知る	たまたま Twitter を見てたら，自分と同じ経験している人のアカウントを見つけて，LGBT とか FtM とかの用語を初めて知るわけ。これが本当の確信だった。まあ，今ほど情報が多くなかったっていうことかな。（A 氏）
	「トランスジェンダー」に自身が当てはまることに気づく	ずっと自分の中で周りの子と違うっていう認識はあったのですが，答え合わせをする機会がなかったんですね。でも，高校生になって，ふとした時に家のパソコンで自分の悩みについて調べてみたら，トランスジェンダーがヒットしたんです。そこでやっと「あ，自分はこれなんだ」って。やっと答えがわかったような気がしました（C 氏）

Table 2　等至点および必須通過点に関する見出し例と発言例（続き）

仲間関係での カミングアウト	友人への カミングアウト	一番初めにカミングアウトした子が，高校 3 年間同じクラスやった女の子やな。その子と話した次の日に夜中 1 時くらいに「起きてる？」って LINE して，めちゃくちゃ長文で伝えて。相手が反応に困るやろうなと思ったから電話はやめた。（A 氏）
	交際相手への カミングアウト	（交際相手は）男の子として自分を見ていた。最初は普通に友達やって，ずっと仲良かったし。付き合ってからは公表してたし。（B 氏）
親に打ち明けざるを 得ない状況	外見の変化	化粧もやめて，ズボン履いて，髪もバッサリ切って。（中略）服装とかで段々わかりますよね。親には遅かれ早かれ言わないといけないなぁっていうのはありました。（C 氏）
	治療の必要性	いつかは言わなあかんし。このままじゃ生きていかれへんから。治療もしたいし。（A 氏）
親へのカミングアウト	母親への カミングアウト	（次にカミングアウトしたのは）20 歳の時に母親です。遅いですよね。両親には遅かれ早かれ言わないといけないっていうのはずっとあったんですけど，ずるずると先延ばしにしてしまいました。大学でオープンにしたときに，嫌な反応をする人がいなくて，あ，自分ってこんなに受け入れてもらえるんだってすごく自信がついたんですね。それでやっと身近な存在である家族，僕の場合は母親なんですが，言おうと決心がつきました。（C 氏）
カミングアウト対象の 広がり	他の親族への カミングアウト	祖父母ですね。「治療する前に会っておかないと驚かしてしまうな」と思ったので，母親にカミングアウトしてから，母親と一緒に家に行ってカミングアウトしましたね。（C 氏）
	教師への カミングアウト	高 1 のときの担任も気づいていたと思う。でも，「自分から言わずに高校卒業するのもな」と思って。「あんなに気にかけてくれていたのに。自分の口から話すのが誠意かな」と思って。「言わないのは冷たいな」と思って。（A 氏）
	学校への要求	校長の所に「スカート嫌」って話しに行ったけど，私立で厳しくて，「病院行って診断書もらって提出しろ」って言われて，「いや，提出しろっておかしくない？」って思った。そのときは病院も行く気なかったら，提出せんかったけど。（B 氏）
トランスジェンダー としてありのままの 自分の生き方を 選択する	身体的治療の開始	（祖父母へのカミングアウトの）数日後に病院に通って治療をし始めました。母も気になったようなので，一緒に行きましたね。（C 氏）
	自認する性での 社会参加	高校辞めて色んな場所で働いてきたけど，全員男として接しているし。1 人でよく飲みに行くけど，喋るのも好きやから，隣に座った人と仲良くなるし。今も現場で大工してるけど，普通に力もある。身長も高いから普通に男なんよ。（B 氏）

(2)〈性別違和への気づき〉から〈ジェンダーに関する葛藤〉を経て，〈「トランスジェンダー」概念の発見〉まで

トランスジェンダー当事者のカミングアウトをめぐるプロセスから，全ての研究協力者が〈性別違和への気づき〉の後に，特に学校生活の中で〈ジェンダーに関する葛藤〉を強める経験をしていたことが示された。A 氏，B 氏，C 氏に共通して，幼稚園や中学校，高等学校での制服のスカート着用を機会に性別違和を抱いており，学校におけるジェンダーに関する制度と出会い，自らの性別違和への気づきにつながることが示された。一方で，性的指向が自らの身体的性と同性であることへの気づきも自らの性別違和を確信させる契機となっているようであった。その後に，体育などの更衣を伴う授業や，制服登校を続けなければならないこと，修

学旅行などの宿泊を伴う学校行事など，学校教育の枠組みに含まれる性別分化の中で，ジェンダーに関する葛藤を強めていることも明らかとなった。一方で，A 氏の語るように，友人との会話の中で，関心事や性的指向が周囲の者と一致しないことでの葛藤を抱くことも示された。

この時期は，トランスジェンダー当事者の体験として，「何でかわからんけど，嫌やって」（B 氏）と語られるように，これらの葛藤には名前がついておらず，自分がなぜそのような葛藤を抱いているのか，自らの葛藤の正体が何であるのかわからない状態が続いていた時期であった。しかし，自らの悩みをインターネットで検索したり，SNS 等でトランスジェンダー当事者の体験を知ったりすることで，〈「トランスジェンダー」概念の発見〉に至っていた。そこで，自身が経験していた葛藤が，自身が「トランスジェンダー」であることが要因となっている可能性に気づくというプロセスを辿ることが示された。

(3)〈仲間へのカミングアウト〉に至るプロセス

トランスジェンダーという概念を知り，自身が抱いてきた葛藤の要因が自身のセクシュアリティにあるという可能性に気づいた後，自身がトランスジェンダーであることを認められるか，認められないかという分岐点が生じていた。B 氏は「ここで，自分は男になりたいっていうより，男なんやな，って思った」と語るように，自らがトランスジェンダーであることが腑に落ちる体験をしていた。しかし，A 氏はトランスジェンダーについて知ってからも，「決して嬉しいものではなくて…マイノリティであって，そういう生き方をしたからハッピーエンドなんかって言ったらそうじゃないし，性同一性障害っていうワードがしっくりこなくて」と語るように，トランスジェンダーとして生きることへの不安や，「障害」として認識されていることへの戸惑いが生じ，自らがトランスジェンダーであることを認められない時期が続いたようであった。C 氏においても，「女の子に好かれる自分は受け入れたらあかんって考えてましたね」「自分の中で，普通になれるんじゃないか，男の人を好きになれるんじゃないか，みたいな変な希望があって，女の子であり続けようとした」「そこには自分なんかなくて，ただ自分は女だって思いこませるだけの行動です」と語るように，トランスジェンダーである自身を認められず，シスジェンダーであろうと苦悩していたようであった。しかしながら，A 氏は SNS 等でトランスジェンダー当事者の体験や身体的治療に関する情報を集め続けるなかで，〈トランスジェンダーとしての生き方への羨望〉を抱くようになり，友人へのカミングアウトを決意した。C 氏は「（女性的に振舞おうと努力するも）すぐに断念して，本当の自分が出てくる」と述べているように，〈シスジェンダーであろうとすることへの諦め〉に至った。

上記のような経験をし，研究協力者は友人や交際相手へのカミングアウトに至っていた。A 氏の語りから，知り合ったトランスジェンダーの《当事者からの助言》がカミングアウトを促

進する要因として働いていた。また，A 氏は親しい友人の中でも，《受容的な友人》を選択してカミングアウトを行っていた。C 氏においては，大学に入学し，服装や髪型などを《自己選択しやすい環境》になったことで，友人へのカミングアウトをしやすくなったようであった。

(4)〈親へのカミングアウト〉に至るプロセス

全ての研究協力者が，初めてのカミングアウトは友人や交際相手に対して行い，〈カミングアウトに対する受容的反応〉を得ることができていた。友人や交際相手からは驚きを示されるものの，否定されることはなく，「これからも仲良くしたい」とそれを受容されたり（A 氏），「詳しいことわからないし，知りたい」と理解したいという態度を示されたりする経験をしていた（C 氏）。このように，周囲に理解者を得た後に，A 氏の「いつかは言わなあかんし。このままじゃ生きていかれへんから。治療もしたいし」という語りにみられるように，治療の必要性や学校の制服に対する要求などの必要性から，〈親に打ち明けざるを得ない状況〉となり，〈親へのカミングアウト〉に至っていた。ここでのカミングアウトについては，研究協力者の全員が母親を対象としていた。また，A 氏からは親へのカミングアウトをする前に，両親に対して「もう，ごめんなさいって感じ」「ただただ普通に卒業して，普通に就職して，普通に結婚して，一般的な普通の道を進まないと，って思っていたから」「こんな普通じゃない道を歩んでしまってごめん」といった〈「普通」に生きられないことへの申し訳なさ〉を抱えていたことが語られた。

C 氏の語りから，友人が自身のセクシュアリティを受け入れ，理解を示そうとするといった《カミングアウトへの被受容体験》が親へのカミングアウトを促進する要因となったことが示された。一方で，B 氏からは，カミングアウトをする以前の日常生活の様子から，自身の親が多様性に対する理解がなく，偏見が強いと感じており，自身のセクシュアリティについても理解を得られないだろうと感じていたことが語られた。このように，親が日常的に《多様性に対する否定的態度》をとっていると認知していることは，当事者にとってカミングアウトをすることを阻害する要因として働いていた。

(5)〈カミングアウトの対象の広がり〉から〈トランスジェンダーとして自分らしい生き方を選択する〉に至るプロセス

母親へのカミングアウトを行い，A 氏と C 氏は自身のセクシュアリティについて母親から理解を示されるといった〈親からの受容的反応〉を経験していた。そして，〈身体的治療に対する希望の高まり〉を経て，治療を開始するためには両親の承認が必要であることや（A 氏），治療後に容姿が変化する前に会っておきたいといった思いから（C 氏），父親や祖父母など他の親族にカミングアウトを行っていた。また，A 氏は高等学校の卒業という節目の時期

に，信頼していた教師へのカミングアウトも行っていた。このように，〈カミングアウトの対象の広がり〉がみられ，ここでのカミングアウトに対しても〈周囲からの受容的反応〉を経験し，自認する性への身体的治療を開始したり，仕事を始めたりするなど，〈トランスジェンダーとして自分らしい生き方を選択する〉ようになっていた。

B 氏においては，母親にカミングアウトをした際に，「はあ！？って怒っている感じやった」と語るように，〈親からの否定的反応〉を経験していた。しかし，しばらく母親と会話をしない期間を経て，「話さへん間にむこうも色々考えたみたい。昔からそんな感じやったしなぁ，とか言われるようになった」とのことで，B 氏のセクシュアリティについて何らかの〈親からの捉えなおし〉が生じたようであった。その結果，母親から伝えるという間接的な形であったものの，父親へのカミングアウトに至っていた。また，B 氏は同時期に制服のスカート着用をしないという要求を学校に行っていた。しかし，そのような B 氏のニーズに対して配慮が得られないなど，〈周囲からの否定的な反応〉を経験し，学校を退学していた。このように，自ら〈環境を選択する〉ことを通して，周囲に男性であると宣言して仕事をするなど，〈トランスジェンダーとして自分らしい生き方を選択する〉ことに至っていた。

(6) 語りからは得られなかったが，論理的に存在すると考えられる選択や径路

TEM の方法に従い，対象者の語りからは得られなかったが論理的には存在すると考えられる選択や径路を検討し，〈カミングアウトに対する否定的反応〉，〈カミングアウトへの葛藤の増加〉，〈ジェンダーに関する葛藤を抱え込む〉という分岐点，〈トランスジェンダーである自分を隠して生きる〉という両極化した等至点を作成した。

4　考察

(1) ジェンダーに関する葛藤のプロセスに関する考察

本研究の研究協力者 3 名に共通して，性別違和への気づきの後に，制服着用や授業での更衣，宿泊学習など，学校生活の中でジェンダーに関する葛藤を繰り返し経験していることが語られていた。丸井（2018）の教員を対象とした調査では，不登校生徒の対応時に，セクシュアル・マイノリティの可能性があることを念頭に置いていると回答した教員は小・中学校，高等学校を平均して 7.2% であり，9 割以上の教員はセクシュアル・マイノリティの子どもが在籍していることを想定していないことが明らかにされている。このように，学校生活の中にある制度や施設，文化，慣習には，典型的な「男・女」の性別区分を前提としたものが根強く存在し，その中にはトランスジェンダーの子どもたちを苦しめるものも多く存在していると考えられる。したがって，こうした男女二分論を前提とした制度や施設，文化，慣習については，今

後ますます見直しが必要であり，そのためには教職員への理解啓発を進めていくことが求められる。

続いて，研究協力者の語りから，〈「トランスジェンダー」概念の発見〉によって自らの性別違和の原因を知るという経験をしていたことが明らかにされたが，その後のプロセスについては多様性が示された。原因を知った後に，B 氏は自身がトランスジェンダーであることを受け入れることができたが，A 氏や C 氏においては自身がトランスジェンダーであることを受け入れられずにいた期間があった。A 氏は「性同一性障害」の概念も知る中で自身が「障害者」であることへの戸惑いを感じており，C 氏もシスジェンダーになろうと努力し続けていたことが語られた。セクシュアル・マイノリティについては近年の社会的な認知度の高まりから，インターネットやメディア等から多くの情報を得ることができる現状にあり，本研究の研究協力者においても 3 名全員がインターネットサイトや SNS を通じて，「トランスジェンダー」概念を発見していた。一方で，日高（2017）の LGBT 当事者を対象としたオンライン調査では，学校教育においてセクシュアル・マイノリティについての知識を教えられたか尋ねる質問項目に対しては，「一切習っていない」という回答が全体の 68.0% を占め，「異常なものとして習った」「否定的な情報を得た」という回答が合わせて 22.6% であった。このように，インターネットやメディア等では情報があふれているにも関わらず，学校現場においては性の多様性に関する情報提供の機会が明らかに不足しており，情報提供がなされていたとしても内容が不適切なものである可能性が高いため，セクシュアル・マイノリティの児童生徒は独りで自発的に情報を集めなければ，自身のセクシュアリティに対する知識を得ることができない現状にあると言える。そして，インターネット上にある当事者にとってネガティブに感じられる用語や意見に触れる可能性もあり，人知れず独りで葛藤を強めることが推察される。

(2) カミングアウトをめぐるプロセスに関する考察

研究協力者 3 名に共通して，最初のカミングアウトは，家族や教師よりも同年代の友人や交際相手などの仲間関係の中で行われていた。ここでのカミングアウトに対して，友人や交際相手も受容的に応じ，友人関係を維持したり，恋人関係に発展したりしていた。そして，C 氏の語りから，友人から受容された経験が親へのカミングアウトを促進し，自認する性別に向けた身体的な治療へと進むための重要な要因となり得ることが示された。

続いて，研究協力者 3 名に共通して，親へのカミングアウト，特に母親へのカミングアウトを行っていた。ここでのカミングアウトについては，いずれも「隠し通すことができないから」「身体的な治療に親の同意が必要だから」といった理由から，やむを得ず親へのカミングアウトを行っていた。しかしながら，A 氏が「普通に卒業して，普通に就職して，普通に結婚して，一般的な普通の道を進まないと，って思っていた」と語るように，セクシュアル・マ

イノリティであることによって親の期待に沿えないことについて罪悪感を抱くことが示された。このように，トランスジェンダー当事者にとっては，服装や立ち振る舞いなど，ジェンダー表現に関することや，身体的治療の必要性などから，親に対していずれは打ち明けざるを得ないという思いを抱えているものの，カミングアウトを受容される以前においてはセクシュアル・マイノリティであることによって親の期待に沿えないことへの罪悪感との間で葛藤する可能性があることもうかがわれた。一方で，研究協力者の語りからは，親へのカミングアウトを済ませ，身近な支持者を得ることで，その他の親族や学校など，カミングアウトの対象を広げ，トランスジェンダーとして自分らしい生き方を選択することにつながっていることが示された。そのように，家族内に支持者を得ることはトランスジェンダー当事者にとって，葛藤を和らげ，自分らしく生きるために非常に重要な要因となり得る。いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン（2014）の調査結果からも，セクシュアル・マイノリティの児童生徒のカミングアウトの対象として選択されやすいのは同年代の児童生徒であり，家族や教員などの大人に対するカミングアウトが困難である実態が指摘されている。本研究の結果も踏まえると，トランスジェンダーの児童生徒への支援として，身近な大人に対して安心して自らの思いを語ることができる場を作ることが必要であると考えられる。

(3) 有効な教育的支援を可能にする環境への示唆

本研究が示した，トランスジェンダーの児童生徒のジェンダーに関する葛藤やカミングアウトをめぐる葛藤とその解決のプロセスから，いくつかの学校教育における課題が示された。それらを踏まえ，有効な教育的支援を可能にする環境について論じることとする。

まず，学校には，男女二分論を前提とした制度や施設，文化，慣習が根強く存在し，それらはトランスジェンダーの児童生徒のジェンダーに関する葛藤を強く感じさせる要因となっていることが明らかとなった。特に，性別違和への気づきの時期については，A 氏が高校生，B 氏が中学生，C 氏は幼児期とばらつきがあり，全ての学校種において，性の多様性に配慮した環境づくりや教育実践を行う必要があると考えられる。セクシュアル・マイノリティに関する実態調査によると，性別違和のある女子においては，多くの場合は小学 6 年生～高校 1 年生に自覚しているが（いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン，2014），より早期の小学校就学前の段階で自覚していることが少なくないことも指摘されている（天野・佐々木・松本・大守，2019）。C 氏のように，幼児期の段階で自らの性別違和に気づく者もおり，その後の学校生活の中でジェンダーに関する葛藤を繰り返し経験する可能性があることを考慮すると，幼児期や小学校低学年などのより早期の段階の教育においても，幼児児童の性別違和に対する配慮が必要であると考えられる。幼稚園や保育園の場においても，制服着用のみならず，「男の子はこっち，女の子はあっち」など，男女二分化した性別区分に基づく関わりが自然と

行われていることが指摘されている（木村，1999）。近年，セクシュアル・マイノリティに対する社会的な認知度も高まっており，学校教員に対する現職研修が行われるようになってきているが，従来から性をめぐる問題は思春期以降を中心にとらえられる傾向にあり，幼児期の性をめぐる問題については十分に検討されていない現状にある。したがって，就学前の教育や初等教育に携わる教師，保育士に対しても，性の多様性に関する研修を進めていく必要があると言えよう。

次に，現行の学校教育では，必ずしもセクシュアル・マイノリティに関する正確な知識を得る場がないことがうかがわれる。したがって，このような性の多様性に関する知識習得の課題に対しては，子どもたちに対する性の多様性を含む包括的な性教育について，発達段階を考慮しながら早期から実施していくことが必要であると考えられる。特に，A 氏においては SNS 等でのトランスジェンダー当事者の発信や，偶然出会った当事者からの助言が，自らのセクシュアリティを受容し，周囲へのカミングアウトを促し，自分らしく生きることを選択する契機となっていることがうかがわれる。特に，セクシュアル・マイノリティの児童生徒にとって，ロールモデルの発見が有効な社会的サポートとなり得ることが指摘されている（土肥，2015；吉川，2018）。したがって，学校において性の多様性に関する教育を実践する際には，当事者からの体験談を聴く機会を設定するなどの取り組みによって，セクシュアル・マイノリティの児童生徒にとって，ジェンダーに関する葛藤を解決する方法を知ったり，就職や進学などのキャリア選択に対して肯定的な見通しを形成したりする機会になると考えられる。また，本研究の結果から，カミングアウトを肯定的に受け止められる経験は，親や教師などの他の対象へのカミングアウトを促し，トランスジェンダーとして自分らしく生きることをエンパワメントすることが示された。最初にカミングアウトの対象となりやすいのは，トランスジェンダーの児童生徒と日頃から付き合いがあり，信頼できる同年代の児童生徒であるが，この児童生徒らもセクシュアル・マイノリティに関する十分かつ正確な情報提供がなされておらず，社会や学校内でのセクシュアル・マイノリティに対する偏見や差別的な認識の影響を受けている可能性もある。したがって，性の多様性に関する教育の実践は，セクシュアル・マイノリティの児童生徒の知識獲得のみならず，その周囲の児童生徒の受容的態度を育てていく上でも有効な支援となり得る。

続いて，本研究で示されたカミングアウトをめぐるプロセスからは，親や教師などの身近な大人へのカミングアウトに対する壁の高さが示唆された。トランスジェンダーの児童生徒の場合，服装や振る舞い，利用する施設など求めるべき変更が多いことから，同年代の児童生徒への相談のみでは，ジェンダーに関する葛藤が解消されないまま，自らのセクシュアリティを隠して生活していることが推察される。したがって，親や教師などの身近な大人に対して安心して打ち明けることのできる環境を作る必要があると考えられる。これについて，遠藤（2016）

は「『カミングアウトされたら向き合う』というよりも『カミングアウトされる前から主体的にメッセージを出す』こと」を求めており，例えば，セクシュアル・マイノリティに関するポスターやリーフレットの掲示や，漫画や本を置く，最近あった報道に触れてみるなど，「いざ助けを求めたいと思った際のハードル」が低くなるような工夫が提案されている。このように，自らのセクシュアリティについて語っても良いという認識を児童生徒に与える環境づくりが必要であると考えられる。

そして，カミングアウトをめぐって，B 氏より母親から一旦は否定的な反応をされた経験をしたことが語られた。その後，母親とやりとりをしない期間を経て，母親から B 氏やトランスジェンダーに対する何らかの捉えなおしが生じ，受容的態度に転じるといった心情の変化が示された。荘島（2010）は，身体的性別を変更する子どもからカミングアウトを受けた母親が，「性別変更を望むわが子を簡単には受け入れることができない」と語っていたものの，幼少期からのわが子との関係性や母親自身の人生経験が語り直されていく中で，再編されていく過程を示唆した。このように，カミングアウトを受けた者にも，葛藤や心理的動揺が生じることが推察される。しかしながら，セクシュアル・マイノリティ当事者のカミングアウトに関する研究は散見されるものの，カミングアウトを受けた者に関する研究は非常に少ない。そのため，カミングアウトをどのように受け止めれば良いのか，受け止めることが難しいときにどのように気持ちを整理すれば良いのかといった葛藤に対する支援についても十分に行われているとは言えない。また，このような葛藤や心理的動揺は，親だけでなく，カミングアウトを受けた同年代の児童生徒にとっても生じ得ると考えられる。したがって，日常的に理解啓発を進めていくとともに，スクールカウンセラーとの連携などを通して，カミングアウトを受けた者の抱える葛藤や動揺に対する心理的な支援も求められる。

5　本研究の限界と今後の課題

本研究は，サンプルサイズが小さく，本研究では FtM 当事者のみを対象としているため，結果は一義的である可能性があり，代表性に課題が残る。特に，トランスジェンダーに関する先行研究においても，FtM と MtF では性別違和への気づきや，ジェンダーに関する葛藤などに違いがあることが示されていることから（天野ら，2019 など），今後は MtF 当事者を対象とした検討も必要であると考えられる。

次に，本研究は回想的に語られた内容をもとに行われた分析であるため，研究協力者が過去を振り返っている時点で語りの中に到達点が無意識に設定されていると推察される。また，本研究の研究協力者は，周囲へのカミングアウトを行った上で，トランスジェンダーとしての生き方を選択できた者が対象となっている。しかしながら，実際には周囲へのカミングアウトが

できず，シスジェンダーを装って生きている者もいることが考えられる。そのような者ほど様々な葛藤を日々強く感じながら生活していることが推察されることから，今後は現在まさに家族などの身近な人々へのカミングアウトに対して葛藤を抱いている者についても焦点を当てた研究が必要である。

文献

天野佑美・佐々木新・松本洋輔・大守伊織.（2019）．性別違和をもつ患者の診療録から見える学校生活場面での困難さ．*兵庫教育大学教育学実践学論集*，**20**, 39-48.

American Psychiatric Association.（2015）. Guidelines for psychological practice with transgender and gender nonconforming people. *American Psychologist*, **70**, 832-864.

土肥いつき.（2015）．トランスジェンダー生徒の学校経験：学校の中の性別分化とジェンダー葛藤．*教育社会学研究*，**97**, 47-66.

遠藤まめた.（2016）．子どもの LGBT への支援を考える．*心の科学*，**189**, 50-53.

いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン.（2014）．LGBT の学校生活における実態調査（2013）結果報告書．https : //uploads.strikinglycdn.com/files/e 77091f1-b6a7-40d7-a6f2-c2b86e35b009/LGBT%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%94%9F%E6%B4%BB%E8%AA%BF%E6%9F%BB. pdf（2021 年 12 月 4 日閲覧）.

石丸径一郎.（2005）．性的マイノリティにおける受容体験と自尊心：カミングアウトの効果に関する実験的検討．*コミュニティ心理学研究*，**9**, 14-24.

金田智之.（2003）.「抵抗」のあとに何が来るのか？：フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて．*年報社会学論集*，**16**, 126-137.

木村涼子.（1999）．*学校文化とジェンダー*．東京：勁草書房.

丸井淑美.（2020．性的少数者の学校生活の実態と学校教育の課題に関する研究：女性同性愛，男性同性愛，性同一性障害（性別違和）の当事者インタビューより．*日本健康相談活動学会誌*，**15**, 143-152.

文部科学省.（2010）．児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について（通知）．https : //www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinken/sankosiryo/1348938.htm（2021 年 12 月 4 日閲覧）.

文部科学省.（2014）．学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について．https : //www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf（2021 年 12 月 4 日閲覧）.

三宮愛.（2014）．女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか：面接法と質問紙調査法による検討．*女性学評論*，**28**, 133-161.

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Valsiner, J.（2006）．複線径路・等至性モデル：人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して．*質的心理学研究*，**5**, 255-276.

荘島幸子（2010）．性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し．*発達心理学研究*，**21**, 83-94.

高藤真作・岡本祐子.（2017）．青年期の男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセス．*心理臨床学研究*，**35**, 297-303.